



弘前医療福祉大学紀要

*Journal of Hirosaki University
of
Health and Welfare*

第5巻 第1号
2014年3月発行

弘前医療福祉大紀要
J. Hirosaki Univ. Health Welf.

弘前医療福祉大学紀要編集委員会

目 次

[総 説]	松果体腫瘍と発達・思春期 2. 正常松果体との関連における松果体実質腫瘍についての考察 加地 隆	1
[原 著]	高1女子のヒトパピローマウイルスワクチン接種に対処の要因 —青森県中弘南黒地区における— 齋藤 亮子、竹森 幸一、小山 睦美、小玉 有子、伊藤 久子	19
[原 著]	医療・福祉系学生の情動知能とスキルに関する研究 ～学生と看護師・介護士の情動スキルの比較～ 小玉 有子、奈良 知子、戸来 睦雄、齋藤三千政	31
[原 著]	高齢者へのリビングウィルの啓発活動に関する研究 —作成した冊子による個別介入の効果— 塩谷 千晶	39
[原 著]	GGCX 遺伝子多型がオステオカルシンのGla化と骨密度に及ぼす影響 —第二報 GGCX 遺伝子多型によるucOC/OC比の検討— 長谷川秀隆、神口 浩、村上 大介、長谷川結香、松木 勇樹、松木 秀明	47
[研究報告]	青森県の小・中・高校におけるメンタルヘルス問題と 精神保健教育の現状に関する調査研究 板山 稔、高田絵理子、小玉 有子、田中 留伊	59
[研究報告]	新たに開発した「洗髪シート」の実用性に関する調査 佐藤 厚子、工藤 雄行、福士 尚葵、磯本 章子	69
[研究報告]	わが国の統計学解説書に見られる Fisher の直接確率法の 両側確率と片側確率をめぐる混乱 竹森 幸一、三上 聖治、仁平 将、富田 恵	77
[研究報告]	包括的アプローチの枠組みから見たフィンランドの教育 ～生徒指導先進地域の実践比較研究～ 小玉 有子、中村 孝、高橋あつ子、金山 健一、栗原 慎二	83
	紀要規程・投稿要項	93
	編集後記	
	紀要編集委員会委員	

弘前医療福祉大学紀要規程

(目的)

第1条 弘前医療福祉大学(以下「本学」という)における紀要の名称を「弘前医療福祉大学紀要」Journal of Hirosaki University of Health and Welfare (ISSN 2185-0550)とし、以下「紀要」という。

紀要は本学における研究成果発表を目的として、定期的に刊行される。

(発刊)

第2条 紀要の発刊は原則として年1回とし、本学紀要編集委員会(以下「委員会」という)がその任にあたる。委員会の委員は教授会の議を経て選出され、任期は原則として2年とする。

2 紀要は、発刊前年度の10月1日から発刊年度の9月30日までに投稿された論文を一号として刊行する。

3 発刊期日は原則として発刊年度の末日までとする。

(投稿資格者)

第3条 紀要への投稿資格者は、次のとおりとする。

- 1) 本学専任教員
- 2) 第一号の共同研究者。但し、筆頭著者は本学専任教員とする。
- 3) その他、委員会が適切と認めた者

(受付・査読・採否)

第4条 投稿原稿は他誌に未掲載で且つ投稿中ではない論文に限る。

2 投稿原稿は各学科の委員を経て随時受け付けられ、委員会は預かり証を発行する。

3 預かった論文のうち短報以外はすべて第三者に査読される。査読後、委員会は投稿論文の種類・内容・体裁について修正を求めることがある。

4 論文の採否は委員会において決定され、その結果は書面で通知される。

(著作権)

第5条 掲載論文の著作権は本学に帰属し、論文の電子化は了承されたものとする。

但し著者が当該論文を利用する場合は本学の許諾を必要としない。

(経費負担)

第6条 投稿原稿が規定の枚数を超過した分については、著者の負担とする。

2 初校の際には別刷の必要部数を委員会に申告するものとする。

3 別刷は10部まで共通経費負担とし、それを越えた分は著者負担とする。

(倫理的配慮)

第7条 投稿論文は、倫理的配慮がなされ、且つその旨が本文中に明記されなければならない。

(その他)

第8条 論文の投稿要項に関しては、委員会が別に定める。

附則 本規程は2009年7月16日から施行する。

本規程は2013年5月21日から施行する。

弘前医療福祉大学紀要投稿要項

1. 投稿論文

投稿論文は他誌に未掲載で且つ投稿中ではない和文及び英文の総説、論説、原著、研究報告、研究ノート、短報、その他とし、随時受け付ける。

2. 論文の種類

他誌に未掲載で投稿中ではない以下①-⑦の論文を受け付ける。

尚、①-⑤は査読があり、⑥⑦は査読なしとする。

- ① 総説：ある主題に関連した研究の解説、総括
- ② 論説：主題に関する理論の構築、展望、提言
- ③ 原著：独創的な研究により、新しい知見、理論を示した論文
- ④ 研究報告：研究上の問題提起、興味深い事実や実態・事例・症例に関する論文
- ⑤ 研究ノート：論文としては未整理であるが、すぐに知らせる意義のある研究
- ⑥ 短報：教育実践報告、研修報告、国際学会、セミナー報告
- ⑦ その他：委員会が必要と認めたもの

3. 投稿資格者

- 1) 本学専任教員
- 2) 1) の共同研究者
- 3) その他 委員会が適切と認めた者

4. 倫理的配慮

人および動物を対象にする研究では、倫理的に配慮し、その旨を本文中に明記する。

研究が適切に行われたことを示すため、「本研究は弘前医療福祉大学研究倫理規程に沿って行われた」、英語論文の場合は“The study was performed in accordance with the Rules for Ethics of Study, Hirosaki University of Health and Welfare.”と文中、または文末に明記する。

執筆・投稿要領

1. 原稿の構成と表記

- 1) 原稿はA4版、10ポイントで1枚につき40字（英字・数字は半角）×40行 横書きとする。

原著、研究報告、総説、論説は10枚（16000字）以内とし、研究ノート、短報、その他は5枚（8000字）以内とする。但し、図表1枚は800字（半枚）分に数えるものとする。欧文の場合にはA4版、ダブルスペースで1枚につき26行でタイプする。

欧文は必ずnative speakerによる校閲を受けたものであること。

- 2) 表紙には論文題名、著者名、所属および所在地（希望するならe-mail アドレスも）を和文と欧文の両方でそれぞれ明記する。さらに本文枚数（引用文献、要旨を含む）、図、表、写真、図表の説明文などの枚数を記載し、最後に論文の種類：「原著」（例）のように明記する。2枚目には600字以内の和文要旨とキーワード3-5語、3枚目には300語以内の英文要旨とkeywords 3-5語を記す。

- 3) 図表の使用は最小限にとどめ、「図1」、「表1」、「写真1」等 それぞれの通し番号をつけ、本文とは別に一括する。

これらの挿入希望場所を本文原稿右余白にそれぞれ指定する。図、表、写真については印刷時の大きさを明記する（例：原寸、70%、50%など）。

- 4) 外国の人名、地名に原語を用いるほか、叙述中の外国語にはできるだけ訳語をつける。

- 5) 注は脚注として最小限にとどめる。

2. 文献記載の様式

- 1) 引用文献は、本文の引用箇所の肩に1) - 3) と表すか、又は引用箇所の文末に（第1著者の姓、発刊西暦年）で表し、最後に一括して引用順又はアルファベット順に掲げる。

- 2) 参考文献は、最後に一括して著者名のアルファベット順に記載する。
- 3) 引用・参考文献の記載方法・順序
 - 〈雑誌〉著者名：表題名、雑誌名、巻（号）：頁－頁、発行年
 - 〈単行本〉著者名：論文題名、書名（版表示）、編者名、頁－頁、発行地：出版社、発行年
 - 〈訳本〉著者名：論文題名、書名（版表示）、編者名、訳者名、頁－頁、発行地：出版社、発行年
3. 投稿の際の提出書類
 - 1) 原稿：表紙、和文要旨、英文要旨、本文、図表
（総説・論説・原著・研究報告・研究ノート・短報 ともに1部、査読を要するものについてはコピーを2部提出する）
 - 2) 紀要原稿提出表（大学共有ファイル内）：連絡先（氏名、住所、電話番号、メールアドレス）と別刷希望部数を記入する。
 - 3) フロッピーディスクまたはCD（1枚）；ソフトはワードとし、ファイル名を「本文」「和文要旨」「英文要旨」「図1」などとする。但し、提出は論文受理後とする。
4. その他
 - 1) 著者校正は原則として一校までとする。校正時の大幅な追加、修正は原則として認めない。
 - 2) 別刷は10部まで共通経費による負担とする。

編 集 後 記

弘前医療福祉大学紀要編集委員会
委員長 吉村教暉

三寒四温の候となり、春の到来が待たれます。ここに 紀要5巻1号をお届けします。

掲載論文の内訳は総説1、原著4、研究報告4の計9編です。平常の授業、外部施設での実習指導、期末テスト、国試対策、卒研指導 等々後学期はとくに多忙となる中で、平素の研究を論文にし、投稿いただいた教員の皆さんに感謝致します。同時に、その活動に協力してくれた教職員の皆さんに御礼申し上げます。

あの3.11から丁度3年がたちました。遅れ続きの被災地復興が最近になってようやく、限られた地域ではあっても順調に進みつつあるとの新聞記事や、2020年東京五輪招致最終プレゼンの佐藤真海さんやソチ五輪の羽生結弦君らの活躍が 沈みがちな被災地の人々に希望と安らぎをもたらすものであって欲しいと思います。

本学はこの春で2回目の卒業生を出し、完成年次を経た大学として安定期に入りつつあります。これは他方で、全国数多の医療福祉系大学間の競争的環境の中で個性を輝かせることが要求される時期でもあります。このような折、救急救命士養成学科の新設とそのための実習棟の新築は本学の大きいなる発展を約束するものとして、その十分な成果が期待されるところです。

幸い 今年度本学卒業生の国試合格率はどの学科でも昨年度を上回る見込みであると聞いております。卒業生たちがケア医療を通して地域にしっかり根ざし、それぞれの職場において笑顔で活動を続けるとき、真の地域貢献はまずこの津軽平野を中心に広がってゆくことと思われま

す。医療福祉の研究が、活発に展開され、長年にわたり継続される時、それが礎となって本学の末長い発展に繋がる日が必ずやって来ることでしょう。紀要編集委員会は常時原稿を受け付けており、各位の力作をお待ちしています。

弘前医療福祉大学
紀要編集委員会

委員長 吉村教暉
副委員長 小山陸美
委員 三浦秀春
委員 佐藤厚子

Journal of Hirosaki University of Health and Welfare

弘前医療福祉大学紀要

第5巻 第1号

平成26年3月31日発行

編集・発行 〒036-8102 弘前市小比内3-18-1
弘前医療福祉大学内 紀要編集委員会
TEL：0172-27-1001

印刷所 〒036-8061 弘前市神田4-4-5
やまと印刷株式会社
TEL：0172-34-4111 FAX：0172-36-3299

Contents

[Review]

Pineal tumors — development and puberty

2. Study of pineal parenchymal tumors in relation to normal pineal organs

Takashi Kachi 1

[Original]

Analysis of the factors that influence the inoculation of first-year high school girls
for human papilloma virus vaccine

Ryoko Saito, Koichi Takemori, Mutsumi Oyama, Ariko Kodama, Hisako Ito 19

[Original]

The Characteristics of the Emotional Skills of College Students in the Medical and Welfare Field:
Comparing Students with Nurses and Care Workers

Ariko Kodama, Tomoko Nara, Mutuo Herai, Michimasa Saitou 31

[Original]

A study on the effectiveness of living wills educational program delivered to elderly people:
The effectiveness of the individual intervention made with the booklet

Chiaki Shioya 39

[Original]

Effect of polymorphisms in the gamma-glutamyl carboxylase gene *GGCX* on gamma-carboxylation of osteocalcin
and bone mineral density: Comparison of the ucOC/OC ratio by *GGCX* gene polymorphism

**Hidetaka Hasegawa, Hiroshi Kamiguchi, Daisuke Murakami,
Yuka Hasegawa, Yuki Matsuki, Hideaki Matsuki** 47

[Report]

Survey-based research on mental health issues and current state of mental health education within elementary,
junior high, and high schools in Aomori Prefecture

Minoru Itayama, Eriko Takada, Ariko Kodama, Rui Tanaka 59

[Report]

Research on the practicality of the “shampoo sheet” newly developed

Atsuko Sato, Yuko Kudo, Naoki Fukushi, Akiko Isomoto 69

[Report]

Confused understanding in statistical handbooks in Japan over two-tail probability
and one-tail probability in the Fisher’s exact probability test

Koichi Takemori, Seiji Mikami, Susumu Nihira, Megumi Tomita 77

[Report]

A Multi-Level Approach to Education in Finland:
A Comparative Study of Countries with Progressive Systems of School Counseling and Guidance

Ariko Kodama, Takashi Nakamaura, Atsuko Takahashi, Kenichi Kanayama, Shinji Kurihara 83